［原著論文］

ラフカディオ・ハーン「英語教師の日記から」の邦訳における多言語性の顕在化

風早 悟史

山陽小野田市立山口東京理科大学 共通教育センター

Manifestation of Multilingual Nature in Japanese Translations of Lafcadio Hearn's "From the Diary of an English Teacher"

Satoshi KAZAHAYA

Center for Liberal Arts and Sciences, Sanyo-Onoda City University

Abstract

This paper studies the Japanese translations of Lafcadio Hearn's "From the Diary of an English Teacher" and explores their role in highlighting the multilingual nature of the original text. "From the Diary of an English Teacher" (1894) is based on Hearn's experience as an English teacher in an ordinary middle school (Jinjo Chugakko) and in a normal school (Shihan Gakko) in Matsue. The essay is one of Hearn's most popular works and has been translated several times into Japanese. In his interactions with Japanese colleagues and students, he showed a strong interest in various types of Japanese, such as that used in the Japanese anthem "Kimigayo" or the Imperial Rescript on Education (Kyoiku Chokugo). Hearn sometimes transcribed these Japanese words using Roman characters, while at other times he translated them into English. This makes his writing difficult to translate into Japanese, and it becomes necessary to examine each translated word closely. Hearn also paid attention to the English compositions written by his students. These writings are also difficult to translate into Japanese and require special strategies. In this paper, we analyze the works of three translators of Hearn's essay: Ryuji Tanabe, Teiichi Hirai, and Sukehiro Hirakawa. Tanabe's version was published in 1926 and was included in the first collected works of Hearn in Japanese. Hirai's version was included in his translation of Hearn's works in 1964, which played an important role in making Hearn popular in Japan. Hirakawa's version, however, is the most accessible and widely read of the three.

キーワード：ラフカディオ・ハーン、小泉八雲、翻訳研究

Key Words: Lafcadio Hearn, Yakumo Koizumi, Translation Studies

はじめに

1890年4月に来日したラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) は、同年7月に島根県尋常中学校と師範学校の英語教師となる契約を結び、9月から教壇に立ち始めた。その時の経験をもとにして書かれた「英語教師の日記から」(“From the Diary of an English Teacher,” 1894) は、現在でも日本で広く読まれているハーンの作品の一つである[*1]。本稿では、複数の邦訳版を比較することによって「日記」の邦訳の多様性を指摘するとともに、邦訳が、言語的多様性という原典の重要な一面をより鮮明に浮かび上がらせる役割を果たし得ることを論じる。

教師として学校生活を送る中で、ハーンは様々な言葉に触れることになる。本稿では、その中からまず、小学生たちが歌うわらべ唄、天長節に講堂で斉唱される「君が代」、生徒たちの前で県知事が奉読する「教育勅語」、亡くなった生徒の追悼会で教師が読み上げる弔辞と僧侶たちが唱える「観音経」を取り上げる。ローマ字表記の日本語、もしくは英訳によって本文中や注釈中に引用されているそれら特殊なテクストの扱い方は、邦訳の趣向を大きく左右する。次に、邦訳における方言の使い方にも着目する。ハーンの「日記」には、松江の方言でなされていたであろう日本人同士の会話が描かれている。それを実際に方言で邦訳するのかどうかも重要な翻訳方略である。最後に、日本語ではないが、ハーンがそのまま掲載している生徒たちの独特の英作文も訳者による翻訳方略の違いが顕著であるので、比較考察する必要がある。

今回の議論で主に取り上げる訳は、田部隆次訳(1926)、平井呈一訳 (1964)、平川祐弘訳(1990)の三つである。いずれも邦題は「英語教師の日記から」である。帝国大学の学生時代にハーンの教えを受けた英文学者である田部の訳は、総勢12名の翻訳者によって第一書房から刊行された『小泉八雲全集』(1926-28) の第3巻に収録された。平井呈一も、日本でのハーン受容に大きな貢献をした人物である。とくに、1940年に岩波文庫から刊行された『怪談』は、現在でも定訳の一つとして読まれ続けている。平井訳の「日記」は、恒文社から刊行された『全訳小泉八雲作品集』(1964-67) に収録されたものである。最後に、平川祐弘訳「日記」は、講談社学術文庫からシリーズとして刊行された〈小泉八雲名作選集〉(1990-92、99) 中の一冊『明治日本の面影』に収録されており、現在、三つの中では最も手に入れやすい訳である。

1. ローマ字表記の日本語

師範学校に付属する小学校の生徒たちが休憩時間に遊んでいる様子を観察する中で、ハーンはわらべ唄に注目し、その歌詞を記載している。

Kango-kango shōya,
Naka yoni shōya,
Dan-don to kunde
Jizō-San no midzu wo
Matsuba no midzu irete,
Makkuri kaéso. [2) *2]

このように、マクロンやアキュート・アクセントなどのダイアクリティカル・マークまで付されたローマ字表記の日本語が示しているとおり、ハーンは歌の内容だけではなく、日本語の音、すなわち、言葉そのものにも強い関心を示していた。英文の中に挿入されるこの一節の異彩さを日本語で再現するにはどのようなやり方があるだろうか。まず、田部隆次は次のように訳した。

かんごかんごしようや
仲よにしようや
どんどんとくんで
地蔵さんの水を
松葉の水入れて
まつくりかへそ[5)]

“Naka yoni shōya” を「仲よにしようや」、“Matsuba no midzu irete” を「松葉の水入れて」というように、漢字を使用して読みやすい日本語に翻訳していることがわかる。平井呈一も同じ訳し方である。注意すべき点は、田部も平井もともに、このわらべ唄の英訳が記載されたハーンの注釈を省いているということである。これはつまり、二人の邦訳では、本文中では内容よりも言葉そのものを優先したというハーンのこだわりが伝わらないということになる。

平川祐弘は、田部と平井とは異なる手法でこのわらべ唄を訳した。

かんごかんご しょうや
なかよに しょうや
どんどんと くんで
ぢぞうさんの みづを
まつばのみづいれて
まっくりかへそ [6)]

漢字を使用してより読みやすい日本語に訳した田部と平井とは異なり、平川はすべて平仮名で訳した。その平

仮名も、時代を考慮に入れたためか、現代の読者には馴染みのうすい旧仮名遣いを用いている。さらに、平川訳ではハーンの原注も翻訳されており、“Let us play the game called kango-kango. Plenteously the water of Jizō-San quickly draw-and pour on the pine-leaves-and turn back again.”[7]という、この唄に対するハーンの英訳が、「さあ、かんごかんご遊びをしましょう。どんどん地蔵さんの水を急いで汲んで、松の葉に注ぎ、また元に返そう」[8] と訳されている。平仮名のみを用いた平川訳のわらべ唄は、漢字も交えた田部訳・平井訳より読みにくいとはいえ、まったく意味が伝わらないというわけではない。それに対して説明的な原注まで訳して示すというのは、邦訳の読者にとっては冗長に感じるかもしれないが、まずローマ字で表記してから英訳を付すという、日本語という異言語へのハーンの関心の強さが再現されているという点では重要な翻訳方略である。

1890年11月3日、明治天皇の天長節を祝うため、ハーンも全校生徒・教職員とともに講堂に集まった。知事の入場と着席が終わると、オルガンが鳴り始め、国家が斉唱される。

Ki-mi ga-a yo-o wa
Chi-yo ni-i-i ya-chi-yo ni sa-za-ré
I-shi-no
I-wa o to na-ri-te
Ko-ke no
Mu-u su-u ma-a-a-dé.[9]

わらべ唄の場合と同じように、ここでもハーンはローマ字表記で「君が代」の歌詞を紹介している。“a-a” や “o-o” などの母音の繰り返しには、実際の歌い方に極力近づけようとするハーンのこだわりが見て取れるだろう。これは、注釈において、“Kimi ga yo wa...” [10]とハイフンも母音の繰り返しもない一般的なローマ字表記の歌詞があらためて記載されていることからも推察できる。その直後には、自ら試みた英訳も添えている[*3]。

三つの訳の中で、「君が代」の引用を最も忠実に訳しているのは平井呈一である。

きみがーあ、よーお は
ちよ にーいーい
やちよ に さざれー
いし の
いわほ と なりて
こけ の
むーうすー まーあーあーで[12]

ハーンが母音を繰り返した箇所に平井は長音記号をあてて対応している。田部訳も、一文字だけ漢字を使用しているものの、全体として平井訳と同じである。しかし、両者ともに、ハーンが付した注釈は省いている。上述したように、ハーンの「日記」では、本文中と注釈中とで異なるローマ字表記の「君が代」が引用されている。英訳も入れれば、三種類もの「君が代」が存在していることになる。田部訳と平井訳では、このバリエーションを知ることはできない。

二つの先行訳とは対照的に、平川訳は、「君が代は千代に八千代に」[13] というように通常の漢字をあて、平井のような長音記号も使用していない。しかし、引用直後の “The anthem ceases” [14]という本文に対して、「「……むうすう　まああで」と国家の斉唱は終った」[15]というように、ハーンのローマ字表記を意識したような平仮名歌詞を補った訳をしている。同じく注釈は省いてはいるが、田部訳と平井訳に比べるとハーンの「君が代」の多様性が反映されているといえるだろう。

2. 原典に「差し替える」訳

1890年10月30日に下賜された「教育勅語」は、ハーンが勤めていた島根県尋常中学校でも県知事によって生徒たちの前で奉読された。ハーンは「日記」中にその全文を引用して紹介しているが、それは、本人も注釈を付してことわっているとおり、ある雑誌に掲載された英訳の転載である。その内容は意訳の度合いが高く、たとえば、「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」にあたる訳は、“display your personal courage and public spirit for the sake of the country whenever required” [16] となっており、国家の緊急事態を意味する「緩急」という言葉が省略されていることがわかる[*4]。ハーン自身も英訳の不十分さを強く感じていたようで、同じ注釈中で、天皇の自称である「朕」の重々しさを英語では再現し難いことを指摘している。

では、この「教育勅語」の英訳引用は、邦訳においてどのように処理されてきたのだろうか。まず、田部隆次と平井呈一は、それを丸ごと原文に差し替えている。さらに注意すべき点は、ハーンの注釈も省いていることである。上述したとおり、ハーンは注釈中で英訳は既存のものであることをことわり、「朕」を例に英訳の難しさにも触れていた。田部訳でも平井訳でも、その注釈は姿を消している。これはつまり、両者の邦訳の読者は、ハーンが使用した既存の英訳に触れられないのはもちろんのこと、そもそもハーンがそれを使用したという事実さえ知り得ないということである。二人がこのような方策を取ったのは、「教育勅語」の英訳を原文に差し替えた結果、「朕」の英訳の

難しさを述べた注釈がそれと矛盾をきたすことになったからかもしれない。

最後の平川訳は、ハーンが「教育勅語」の既存の英訳を利用したこと、そして、その英訳の難しさについて語っていることを訳注によって解説しているが、転載された英訳自体を削除し、「教育勅語」の原文をあてている点では先行訳と同じである[*5]。

作品の終盤、亡くなった横木富三郎という生徒の追悼会で読み上げられる弔辞も「教育勅語」と同様の手法で翻訳されている。その弔辞は、片山尚絅という漢文教師が漢文読み下し文で書いたものであり、作中ではハーンによる英訳で全文引用されている。ただし、実際には、ハーンはこの弔辞の朗読をその場で聞いたわけではない。「日記」では、追悼会が開催されたのは1891年12月23日となっているが、その頃にはもう熊本に移っていたからである。ハーンは、松江時代の同僚や生徒から片山の弔辞や追悼会の様子を教えてもらい、自分もそこに参列したことをフィクションとして創作したのである[*6]。

片山の原稿を手に入れて訳に使用したのは田部が最初である。参考に、その末尾を引用する。

> 君ハ逝ケリ、乃チ逝クト雖モ、其業ヲ勉メ其行ヲ慎メルモノハ永ク本校学生ノ模範ト為テ朽チズ、是職員学友ノ感懐追慕已ム能ハズシテ玆ニ謹デ清酌庶羞ノ典ヲ具シ、敬ンデ君ノ霊ヲ祭ル所以ナリ、尚クハ来タリ饗ケヨ[18] [*7]

横木の学業を学校の誇りとして称え、前途有望だった若者の冥福を祈るこの弔辞が本文とは異質な文体であることは一目瞭然である。森亮は片山の原稿をそのまま取り入れた田部の選択を肯定的にとらえ、「片山翁が読む追悼文は第一書房版の邦訳全集に使われている原稿そのままの漢文読み下し文で読む方がハーンの英訳より味わい深い」と述べている[20]。平井と平川の訳も同様に片山の原稿をあて、ハーンの英訳は省いている。「教育勅語」の場合と同じく、その処置について注記しているのは平川訳のみである。

最後にもう一つ、同じ追悼式で僧侶たちが唱える「観音経」の邦訳について見ておきたい。ハーンは経文の一部を以下のように英訳して紹介している。

> O Thou whose eyes are clear, whose eyes are kind, whose eyes are full of pity and of sweetness-O Thou Lovely One, with thy beautiful face, with thy beautiful eyes－O Thou Pure One, whose luminosity is without spot, whose knowledge is without shadow－O Thou forever shining like that Sun whose glory no power may repel－Thou Sun-like in the course of Thy mercy, pourest Light upon the world! [21]

“O”という感動詞や、観音菩薩に呼びかける“Thou”の繰り返しが、漢訳の読経にはない躍動的な調子を生み出している。このハーン独自の英訳に対して、田部も平井も平川も、先ほどの追悼会での弔辞と同様、漢訳をそのままあてている。

> 真観清浄観
> 広大智慧観
> 悲観及慈観
> 常願常瞻仰
> 無垢清浄光
> 慧日破諸闇
> 能伏災風火
> 普明照世間

ハーンの英訳は厳密に漢訳と一致するというわけではなさそうである。繰り返される“eyes”は、観音菩薩の五観(真観・清浄観・広大智慧観・悲観・慈観)を指し、最後の“Thou Sun-like in the course of Thy mercy, pourest Light upon the world!”は、「普明照世間(普く明らかに世間を照らす)」に対応しているように思われるが[*8]、“with thy beautiful face, with thy beautiful eyes”などは漢訳には見当たらない表現である。反対に、菩薩を常に念じ敬えという意味の「常願常瞻仰」はハーンの英訳では抜けている。このような齟齬はあるものの、漢訳を取り入れたことにより、邦訳の文体の多彩さはさらに増したといえる。さらに、平川訳の訳注ではハーンのこの英訳の日本語訳も読むことができる[*9]。

ここで取り上げた翻訳方略には原文の一部―ハーンが参照した英訳やハーン自身による英訳―を丸ごと削除してしまうという問題点がある。しかし、「教育勅語」や追悼文や漢訳仏典がそのまま使われたことにより、地の文を中心に作品の大部分を構成する標準的な日本語の中に異質なテクストが挿入されることとなり、その結果、文体の多様性が増したというのも事実である。ハーンは、「教育勅語」の文章について“the melodious syllables”と述べ、その奉読の調子を“like a chant”とたとえた[23]。また、追悼会で「観音経」を唱える僧侶たちの声について

は、“the muttering of surf”のようだと言い[24]、その印象深さを記している。ハーンは、奉読式と追悼会において、普段触れていた日本語とはまた別種の日本語に触れたのである。三つの邦訳は、そのハーンの重層的な異言語体験をより際立たせてみせたといえるだろう。

3.方言で訳す

ハーンが気にかけていた生徒の一人であった横木富三郎は成績優秀で将来を嘱望されていたが、尋常中学校4年生の時に17歳で病により亡くなった。その追悼会についてはこれまで述べたとおりである。横木青年の最期は「日記」の中で最も印象深い場面であるが、彼が亡くなった時、ハーンはすでに熊本にいたので、追悼会の場合と同じく、その様子については松江の教え子からの報告にもとづいて創作した[*10]。

枕元に集まった家の者たちに対して、横木は今一度校舎を見たいと最期の望みを口にする。寒い夜中に、使用人のFusaichiに背負われて校舎のシルエットを目にした彼は、次のように言う。

> ‘I can remember all now. I had forgotten-so sick I was. I remember everything again: Oh, Fusaichi, you are very good. I am so glad to have seen the school again.’[26]

病気のつらさに忘れていた学校生活のあらゆることを校舎のシルエットを一目見て思い出したというこの言葉は、学校に対する深い愛着と、自分がその生徒の一人であったことへの誇りを強く感じさせる。

横木の人柄を偲ばせるこの言葉はどのように邦訳することができるのか、ここでも三つの訳を比較したい。まず、田部隆次は次のように訳した。「今みんな思ひ出せる。忘れてゐた―そんなひどい病気だった。みんな又思ひ出す。あゝ、戻市、お前は本當に親切だ。僕はもう一度學校を見たので非常に嬉しい」[27]。現代から見れば若干の硬さを感じさせるかもしれないが、初の邦訳全集に載せるのに適した堅実な訳であるともいえる。続いて、平井呈一の訳である。「こうしていると、なにもかも思い出せるよ。ぼくは忘れていたんだ。―それほど、病気はひどかったんだなあ。なにもかも思い出せる。・・・・房市、お前は親切だな。ぼくは、学校がもういちど見られたんで、とてもうれしいよ」[28]。一読して田部訳よりも柔らかい話し言葉が使われいてることがわかる。しかし、田部訳も平井訳も、出雲出身の青年 (横木の出身地は、現在の出雲市古志町) の話しぶりとしては違和感があるともいえる。

最後に、平川訳は、前二者とは違い、方言を使用したことが特徴である。

> 「こげしちょうと、なんにもかにも思い出せーわ。わし忘れちょったわ。そーほど病気がひどかったんだわなあ。なんにもかんにも思い出せーわ。……房市、おまえは親切だなあ。わしは学校(がっこ)がもういっぺん見られて、ほんにうれしいわ」[29]

これが横木の方言としてどれだけ正確なのかはわからないが、意義のある試みであることは確かである。まず、現実的に、当時の松江の中学生が田部訳や平井訳のようにいわゆる標準語を話していたとは考え難いとするならば、方言で訳すのも何ら不自然なことではないだろう。また、それは、ハーンが松江で聴き慣れていた日本語でもあったはずだ。ハーンはその場に居合わせたわけではなく、松江の元教え子からの報告をもとに創作したと考えられるが、ハーンの想像の中でも横木は彼の土地の言葉で話していたことだろう。さらに重要なことに、その方言は、先ほどの「教育勅語」や追悼文の漢文書き下し文と同じく、邦訳の文体のバリエーションを増やすことに貢献している。ハーンの英文による横木の言葉は標準的な英語で書かれているが、平川訳における横木の方言は、その他の本文を構成する標準的な日本語とは明らかに異質な言葉である。

4.「訳さない」という方略

「日記」にはハーンと日本人が英語を介してコミュニケーションをとる場面が頻出する。まず、第1節では、ハーンが教頭の西田千太郎とともに県庁へ挨拶に行き、そこで西田の通訳を介して知事と会話を交わす様子が描かれる。教室では、授業開始時に生徒がかける「起立」と「礼」の号令が、ハーンに対しては、“Stand Up!”と“Bow down!”というように英語で発せられる[*11]。生徒たちの中でもとくにハーンを慕って自宅にも訪ねてくる幾人かの英語力は次のように説明されている。

> Some of the lads speak a good deal of English. They understand me well when I pronounce every word slowly and distinctly-using simple phrases, and avoiding idioms. When a word with which they are not familiar must be used, we refer to a good English-Japanese dictionary, which gives each vernacular meaning both in the kana and in the Chinese

characters.[31]

ハーンは生徒たちのために発音と言葉の選択に気をつけて英語をしゃべり、やむをえず彼らの知らない言葉を使わねばならないときは、ともに英和辞書を引きながら理解し合おうとした。ハーンは「教育勅語」の奉読や松江の方言といった多様な日本語を耳にしていただけではなく、当時の松江の生徒が話す独特の英語にも触れていたのである。

ハーンは自分のクラスの生徒たちの英語を書く力についてはさらに高く評価しており、“the ability of some of my boys to express their thoughts in it [the English language] is astonishing”[32] と述べているほどである。作中では、生徒たちに書かせた英作文のうちのいくつかをほぼそのままの形で紹介している。次に引用するのは、ある生徒が「蚊」という題で書いた一節である。

> On summer nights we hear the sound of faint voices; and little things come and sting our bodies very violently. We call them ka-in English “mosquitoes.” I think the sting is useful for us, because if we begin to sleep, the ka shall come and sting us, uttering a small voice; *then we shall be bringed back to study by the sting.*’[33]

ハーンの見解によると、日本人の生徒はあらゆるものに教訓を見出だすように教育されている[34]。この作文もその一例であり、蚊は煩わしい虫であるが、それに刺されることによって居眠りから目覚め、勉強に戻ることができると、その効能が説かれている。イタリックで強調された最終文中の“birnged”は、正しくは“brought”とすべきであるが、ハーンはそのまま掲載した。

まず田部は、この英作文を次のように訳した。

> 『夏ノ夜私共ハカスカナ聲ノヒビキヲ聞ク、ソシテ小サイ物ガ來テ、私共ノ體を刺ス。コレヲ蚊ト呼ブ、英語デハ『もすきとーず』私ハコノ刺サレル事ハ有益ト思フ、何故ナレバ私共ガソロソロ居眠リヲ始メルト蚊ガ來テ、小サイ聲ヲ發シナガラ刺ス、ソコデ私共ハ刺サレテ勉強スルヤウニサマサレル』(強調ママ)[35]

片仮名交じり文になっているのは、明治の表記法を再現したためかもしれないし、標準的な漢字平仮名交じり文で書かれた本文との対比によって英作文の異質性を際立たせようとしたためかもしれない。イタリック表記の一文は、「ソコデ私共ハ刺サレテ勉強スルヤウニサマサレル」と明らかにぎこちない日本語に訳されており、もとの英文の生硬さを再現しようとしている考えてよいだろう。

次の平井訳も片仮名交じり文を使っている点では同じである。

> 夏ノ晩、ボクラハ、カスカナ声ノヒビキニヲ耳ニ聞ク。スルト、小サナモノガヤッテキテ、チクリトカラダヲ刺ス。コレヲ蚊ト呼ブ。英語ノ「モスキトーズ」ダ。ボクハ蚊ニ刺サレルコトハ、有益ナコトダト思ウ。ナゼナラ。ボクラガ眠気ヲモヨオシテクルト、蚊ガヤッテキテ、小サナ声ヲタテナガラ、チクリト刺ス。ソコデ、ボクラハ刺サレタタメニ、マタ勉強ニモドレルカラダ。(強調ママ)[36]

「日記」に限らず、平井の訳文は、その日本語としての流麗さが評価されている。たとえば、『小泉八雲事典』では、平井訳の特色について、「江戸文学の伝統に繋がる軽妙な筆運び」、「日本的な機微を色濃く滲ませた文章」、「和漢をほどよく交えた独自の筆致」というふうに解説されている[37]。田部訳のように一読して不自然とわかる日本語にしているわけではないが、「ボクハ蚊ニ刺サレルコトハ、有益ナコトダト思ウ」などのように、いかにも英文直訳調に翻訳することにより、平井は、原文におけるハーンのこなれた英語と生徒の生硬な英語という対比を邦訳においても再現しようとしているといえるだろう。

田部と平井とは異なり、平川訳はこの英作文を訳していない。といっても、省略したわけではなく、英語のまま載せたのである[*12]。「日記」には「蚊」の他にも4編の英作文が引用されているが、平川訳では、それらもすべて英語のままである。仮に翻訳の目的が原典を理解できない読者にその内容を伝えることにのみあるとするならば、平川訳はその役割を果たしていないということになるかもしれない。しかし、ハーンがわざわざ複数の英作文を引用して紹介したのは、「日本人の英語」としてのそれらの特殊性に価値を見出したからであり、それは換言すれば、英語であることにこそ意義があるということである。だとするならば、「訳さない」という平川訳の選択もむしろ正当な翻訳方略であるといえるだろう。

おわりに

「英語教師の日記から」は、近代化・西洋化に邁進する当時の日本の教育観とその実践の一端をのぞき見ることのできる有益な資料であるが、それはまた、作者ハーンと

日本語という外国語とのまじわりの記録でもあった。ただし、その日本語は一枚岩ではなく、いくつものバリエーションを含んでいた。ハーンはそれらをローマ字表記や英訳を駆使して丁寧に書き記していった。日本人の学生が書いた英作文に対しても、その“singularities”[38]を訂正することはしなかった。これら多彩な言葉を構成要素として持つことが、「日記」のテクストとしての特色である。

この多様性は今回取り上げた三つの訳にも反映されていた。いずれの訳でも、標準的な日本語文の中に、漢文書き下し文による「教育勅語」や漢訳による「観音経」など、それとは異質の文体で書かれたテクストが散りばめられていた。最も新しい平川訳では方言まで使われた。また、日本語だけではなく、ハーンの生徒が書いた英作文を英語のまま掲載するという、それまでになかった試み―訳さない訳―も行われ、「日記」の多言語性がより顕在化した。単なる誤訳の訂正にはとどまらない新訳の真価が発揮された訳だといえる[*13]。

ハーンの作品の邦訳には100年を越える歴史がある。日本時代に書かれた怪談ものにやや偏ってはいるものの、訳者の数も多く、訳の趣向も多様である。それらを比較研究することは、翻訳が形作るラフカディオ・ハーン／小泉八雲像を明らかにすることにもつながるはずである。

※　本稿は、2019年3月23日に愛知大学にて開催された、日本比較文化学会中部支部平成30年度例会での口頭発表「ラフカディオ・ハーン「英語教師の日記から」における翻訳の役割」に加筆・修正を加えたものである。また本稿は、科学研究費助成事業若手研究「日本でのラフカディオ・ハーン像の形成において邦訳が果たす役割」(18K12351) の助成を受けている。

注

*1. ただし、完全に事実を記録したものではなく、本文中でも指摘するとおり、ハーンの創作もまじっている。平川祐弘の論考「夢の日本か、現実の日本か―ハーン『英語教師の日記から』」によると、当時の日本学の権威であり、ハーンと親交もあったバジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain) や、作家・英文学者の坪内逍遥もこの作品を高く評価していた[1]。

*2. 田部訳の訳注では、この唄の内容に関しては一部意味が不明な箇所はあるものの、「かごめかごめ」に似た遊びと解説されている[3]。また、平川訳の訳注によると、Makkuri kaésoとは出雲弁で「ひっくりかえそう」の意味ということである[4]。

*3. 英訳は次のとおりである。“May Our Gracious Sovereign reign a thousand years－reign ten thousand years－reign till the little stone grow into a mighty rock, thick-velveted with ancient moss!”[11]

*4. 「教育勅語」の原文は高橋陽一『くわしすぎる教育勅語』(太郎次郎社エディタス、2019)を参照した。

*5. ハーンが転載した英訳の日本語訳は、池田雅之訳「英語教師の日記から」(ラフカディオ・ハーン著『新編 日本の面影』、角川学芸出版、2000)で読むことができる。

*6. 平川祐弘監修『小泉八雲事典』中の項目「片山尚絅」を参照[17]。

*7. この箇所のハーンの英訳は次のとおりである。“－thou hast gone from us; thou hast gone from us! Yet thou hast died, thy earnestness, thy goodness, will long be honoured and told of as examples to the students of our school. Here, therefore, do we, thy teachers and thy schoolmates, hold this service in behalf of thy spirit－with prayer and offerings. Deign thou, O gentle Soul, to honour our love by the acceptance of our humble gifts.”[19]

*8. 読み下し文は、鎌田茂雄『観音経講話』(講談社、2014)を参照した。

*9. 訳は次のとおりである。「おお汝、その眼は清らかに、その眼は親切に、その眼は慈愛に満ちる、―おお汝、美しき顔の、美しき眼の、美しきものよ―おお汝、清らかなるものよ、その光には汚れなく、その知識には闇の影なく、―おお汝、いかなる力も追い払うことの出来ぬ栄光の陽のごとくいつまでも輝き、その慈悲の流れにおいて太陽のごとくにこの世に光を注ぐものよ！」[22]

*10. 平川祐弘監修『小泉八雲事典』中の項目「横木富三郎」を参照[25]。

*11. この英語の号令は、田部訳では、「起立」と「敬禮」というように日本語に訳されているが[30]、平井訳と平川訳は英語をそのまま使っている。

*12. ただし、訳注にはそれぞれの日本語訳も掲載されている。

*13. 英語を英語のままにしておくという平川の新訳が生れた一因として、田部や平井が訳した時よりも日本人の間に英語が浸透したという時代の変化も考えられるだろう。

引用・参考文献

1). 平川祐弘「夢の日本か、現実の日本か―ハーン『英語教師の日記から』」『オリエンタルな夢―小泉八雲と霊

の世界』筑摩書房、1996、pp.249。
2). Hearn, Lafcadio. ""From the Diary of an English Teacher." *Glimpses of Unfamiliar Japan. The Writings of Lafcadio Hearn*, vol.6, Houghton Mifflin, reproduced by Rinsen Book Co., 1988. p.112.
3). 田部隆次訳「英語教師の日記から」小泉八雲著、小泉八雲全集第三巻、第一書房、1926年、pp.554。
4). 平川祐弘訳「英語教師の日記から」小泉八雲著・平川祐弘編『明治日本の面影』、講談社、1990年、p.80。
5). 3) p.554
6). 4) p.18
7). 2) p.112
8). 4) p.80
9). 2) p.126
10). 2) p.126
11). 2) p.126
12). 平井呈一訳「英語教師の日記から」小泉八雲著、全訳小泉八雲作品集第六巻(下)、恒文社、1964年、p.138。
13). 4) p.31
14). 2) p.126
15). 4) p.31
16). 2) p.120
17). 平川祐弘監修『小泉八雲事典』、恒文社、2000年、p.132。
18). 3) p.619
19). 2) pp.170-71
20). 森亮『小泉八雲の文学』、恒文社、1980年、p.143。
21). 2) pp.167-68
22). 4) p.99
23). 2) p.119
24). 2) p.168
25). 17) p.670
26). 2) p.161
27). 3) p.609
28). 12) p.177
29). 4) p.69
30). 3) p.549
31). 2) p.140
32). 2) p.133
33). 2) p.137
34). 2) p.135
35). 3) p.581
36). 12) p.149
37). 17) p.572。
38). 2) p.136